

県中酪協、乳質改善講習会を開催 ～乳成分管理やET和牛子牛の飼養学ぶ～

神奈川県中央酪農協議会（事務局：JA全農かながわ畜産部）は、8月25日、「H27 乳質改善講習会」をJA湘南経済センター（平塚市）で開催した。同協議会の会員、JA職員、その他関係機関などから65名が参集した。

主催者挨拶の中で、JA全農かながわ岩本畜産部長は、「県内の酪農家戸数は、現在200戸まで減少している。神奈川県の酪農存続のため、関係団体と連携を深め協議を続けていく」と述べ、協力を求めると共に、「全農かながわは、研修会の開催や各種酪農経営基盤対策のご案内など、県下酪農家の経営支援を行っていく」と話した。



乳質管理やET和牛子牛の飼養管理について説明する、JA全農・生産振興課の内田講師

講習のテーマは「乳質管理」「子牛の飼養管理」の2つで、JA全農・畜産生産部生産振興課の内田江一郎氏が講師をつとめた。内田氏は、全農飼料畜産中央研究所や米国ウィリアムマイナー農業研究所などで、長年培った酪農、肉牛、飼料の知識や経験をもとに、全国の畜産農家の事例を交えて講演した。

「乳質管理」については、乳脂肪と無脂固形分などの乳成分の季節変動をなくすため、牛の生理や、粗飼料（繊維）、油脂原料飼料等の餌が乳質へ与える影響を詳しく説明した。乳成分は、搾乳間隔、気温や湿度な

どの環境要因、給餌飼料の成分設計や給餌方法・回数など、様々な要因が影響し合って変動するため、バランスのとれた飼料設計の重要性を説いた。また、牛の暑さによる食欲減退などストレス緩和に向けた暑熱対策として、ミネラルや水分を摂取させるための工夫、牛舎の温度管理手法などを紹介した。

また、平成26年度には49頭の受精卵産子の和牛が誕生するなど、酪農家の副収入源として「ET和牛の子牛販売」が注目されていることから、ET和牛子牛の飼養管理について留意点を説明した。ET和牛の子牛は体格が小さく乳用種と比べて寒さに弱いため、乳用子牛と同じ飼養管理方法では事故率が高くなると言われている。牛は妊娠期間が10ヶ月と長く、年1頭程度の出産が限度のため、貴重な子牛の事故率減少に向け、分娩直後の管理方法、初乳給与から代用乳と人工乳を経て離乳までの管理方法、子牛の胃の発達過程に合わせた給餌管理、子牛小屋の衛生・保温対策などについて紹介した。

全農かながわ畜産部では、県酪連会員に対する平成27年都府県酪農基盤対策の一環として、高い技術力を誇る米国CRI社製造の凍結精液の購入に対し、対策費支出で補助を行っている。全農かながわ畜産部は、酪農家の生産性向上に向け、今後も新しい提案を行っていく。